

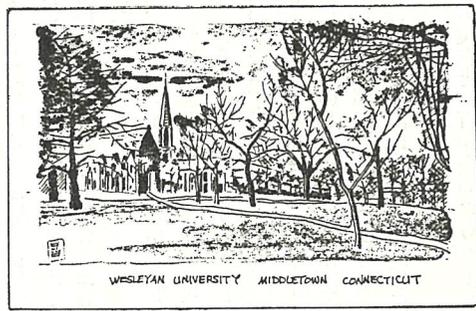
(紀行文)

# ニューイングランド便り

1986

絵&写真と文

## 笠井昌昭



ウェスリアン大学

四月十三日  
ミドルタウン

四月五日にコネティカット州ミドルタウンに到着。ウエスリアン大学内のアパートに到着しました。着いた日はロスアンゼルスからの合服でもまあ何とか過ごせました。が、翌朝目覚めると、窓の外はうっすらと刷いたような雪景色。午ごろからは氷雨。最高気温5℃。以後の一週間は曇天か小雨つづきで、十一日にはまた雪が散らつくし

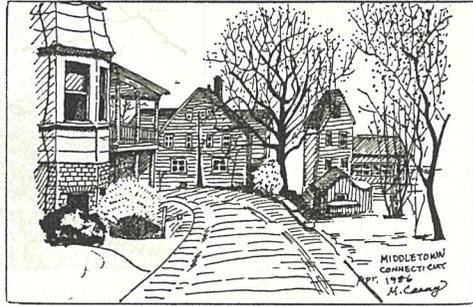
まつ。寒さの身にしみる毎日です。木々の多くはまだ芽吹かず、それなのに、キャンパスを掩っている芝生は青々として、連翹の黄色い花がやけつぱちなほど鮮やかさを誇っています。裸の木々に青い芝生。それがなんともちぐはぐな感じですよ。

四月二十日  
ミドルタウン

今日はよく晴れて快適な気候。すこし大学のまわりを散歩してみました。連翹とともに躑躅が咲き、地植えのクロッカスや黄水仙が白いペンキ塗りの民家のまわりに彩りを添え、木々もようやく柔らかに芽吹きはじめました。桜も咲きはじまりましたが、アパートの近くに巨大な木蓮の樹があつて今が盛り。その巨大さには本当におどろかされます。

こちらへ来て感心するのは、家々がみな高い木々に囲繞されていることです。日本では家を建てる時、敷地内にある木はみな切り倒してしまうでしょう。こちらでは、家を建てるのに必要なところだけ木を切つて、あとの樹木はみな残しているのです。

日本人は自然愛にすぐれた国民などというのは、ひとりよがりもいところではないでしょうか。こちらへ来てみると、地上を走りまわるリス。民家の木のしげみをとびまわるきれいなブルーージェイ（カケス）。おしゃべりな黒つぐみの類等々、身近な動物や小鳥の類も多く、人々は日本人よりもっと自然の中で暮らしているような気がします。

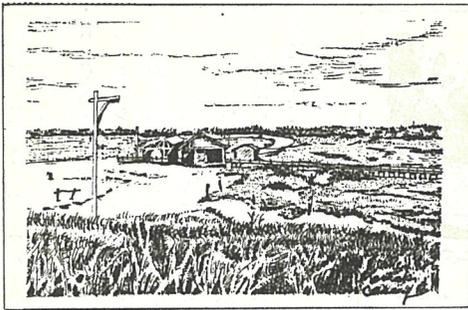


ウェスリアン大学付近の民家

五月十五日

クリントン

タイタス教授に誘われて、はじめて大西洋を見にきました。イェール大学のあるニューヘブンの街からやや北寄りのクリントンの海岸にです。五月の半というのに、厚手のジャンパーを着て、それでもずいぶん肌寒い思いをしました。クリントンの海岸は広大な湿原がまだ茶色く枯れていて、鉛色の空の下で何とも荒涼とした眺めでし



THE SHORES OF CLINTON, CONNECTICUT

Masaki Casey

クリントンの海岸

た。この絵の手前のまだ芽吹かない灌木の茂みには、黄色い鶯ウツクが囀っていました。でも、こちらの鶯はホーホケキヨとは啼いてくれません。湿原にとりかこまれた林の中では、梨と林檎の白い花、そして日本とまったく同じ桃の花が咲いていました。

五月十五日

クリントン

この木の枝ぶりの奇怪さには、しばし歩みを止めて眺め入りました。ハモナセツト・ステイト・パークでのことです。昨年、一九三二年以来という大嵐が二昼夜にわたってこの地方を吹き荒れ、人々は生きた心地もしなかつたといっていました。この樹もその大嵐に梢を裂かれ、枝々をねじ曲げられてしまったのでしよう。じっと見ていると、左右にねじ曲った枝々はあたかも苦痛の喚なげき声をあげているかのようにさえ見えました。

ところで、西海岸のハリケーンには女性の名前がつけられていますが、東海岸のストームはすべて男性の名前です。以前はどこでも女性の名前でしたが、女性差別の間

題が喧しくなってきたから、西と東で男女の名前を分つようになったのだそうです。

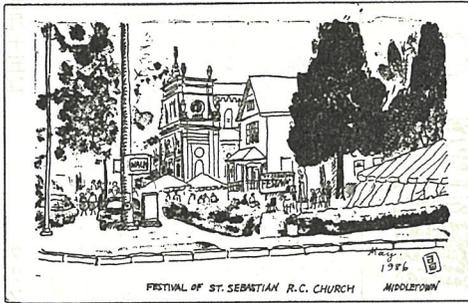


ハモナセット・ステイト・パークにて

五月十八日

ミドルタウン

一足とびに夏になりました。昨日までの肌寒さが信じられないくらいです。今朝は早くから近くの教会の鐘が鳴りひびき、やがて木の間越しに聞えてくる賑やかなブラスパンドのマーチの曲に誘われるようにし



セント・セバスチアンR.C.教会の祭り

て、散歩に出してみました。アパートからほど近いカンリックのセント・セバスチアン・R・C教会のお祭りでした。この教会は、もともとシシリー島にあったのですが、その教会が焼失したのちこの町に住むシシリー人たちが故郷に残っていた教会の図面をとりよせて、そっくりものままにこの地に再建したもので、南欧的な雰囲気を実に伝えていきます。

あとで聞きましたら、このお祭りは、墓

地から始まるとのこと。男たちだけが墓地に集まり、頭からすっぽり白い布をかぶって、教会まで一気に走って行くのだそうです。女性や子どもたちはそれを教会の前で待ちうけ、男たちが教会の中に駆けこみ終わると、あとからぞろぞろ入って行きます。復活を意味するお祭りなのか。

七月十九日

ニューヨーク

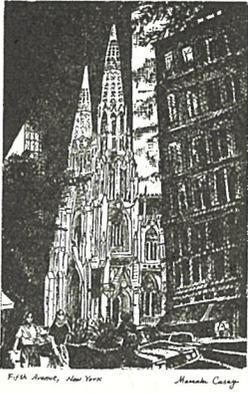
夏休みに入ったら早くニューヨークへ出たいものとおもっていましたが、六月中は果せず、七月初めに計画しましたら、四日は独立記念日で、しかもレディーリパティの修復が成ったということもあり、ニューヨークは観光客で満員。やつとビッグ・アップルが到着きを取り戻したところを見はからって、十八日の朝早く、ミドルタウンからひとりでバスに三時間ゆられて、やってきました。

十二年ぶりのニューヨーク。しかも四ヶ月のあいだ刺戟の少ない田舎街で過したせいもあって、ニューヨークの市内にバスが

入ったときには胸がワクワクしました。日本人はどうしても都会志向型なのでしょう。ウエスリアンの先生たちは「田舎の方がいい」といって、ニューヨークなど行きたくない人が多いのです。

大都会の街は、バカンスで人が出払っているためでしょうか、五番街でさえガランとした感じでした。車でなければ用の足りぬことの多いアメリカの中で、ニューヨークは、その気になれば、どこまでも歩けるのがいちばんうれしい。

十二年まえ訪れたときはほとんど無料だった美術館や博物館が、今ではメトロポリタン美術館でさえ四ドル五〇払わなければ



Fifth Avenue, New York

Manach Gargy

八月二十五日

ニューヨーク五番街

入りにくい状況になっています。何かにつけて窮屈になっているアメリカ経済の現状がここにもあらわれているのでしょうか。

メトロポリタン美術館は、来年四月二十日の日本美術室のオープンに向けて準備中でした。キューレーターのバーバラ・フォードさんの案内で特別に見せてもらいましたが、仏像の部屋は富貴寺の本堂の須弥壇を再現して、そこに出来のいい大日如来像が安置され、絵画の部屋には三井寺勸学院の書院がつくられて、狩野山雪の梅図襖絵がはめこまれ、準備はかなり進んでいます。

七月二十日

ニューヨーク

午後からの予定があいてしまっ、どこへ行こうかと思案していたら、案内役のアメリカ女性が二人ともまだレディーリバーティーを見たことがないというので、それではウォール街を通り抜けて波止場へ来ました。メトロポリタン美術館の前でも、市立図書館の前でもストリートパフォーマーが大勢の人を集めていましたが、観光客



ニューヨークのストリート・パフォーマー

の多いこの波止場には、道化師、梯子乗り、一輪車乗りなどいろいろなストリートパフォーマーがいて、そこに人垣が出来ていました。ついつい私たちもその見物に時間をすごし、レディーリバーティーのすぐそばまでゆく遊覧船の最終便に乗りおくれ、かなり遠くを通るスタテン島通いのフェリーに乗りました。島への往復二五セ

ントという安さには驚きましたが、つい最近までたった五セントだったそうです。

ニューヨークでの印象は、十二年前訪れたとき比べると、よい方へかわってきているという感じでした。街も全体にきれいになっており、治安もずいぶんよくなっています。

八月二十四日

ボストン

ハーバード大学に滞在中の英文科の北垣先生の宿舎に厄介になっています。ハーバード大学ではフォッグ美術館をたづねて、十二年ぶりにローゼンフィールド教授に再会しました。教授はいまやアメリカにおける日本美術研究の第一人者です。

昨日はハーバード大学の前からひとりバスに乗ってボストンへ出、ボストン美術館を一日中たのしみました。バスに乗るとき、運転手に頼んでおいたら、ちゃんと降りるべき停留所まで声をかけてくれました。意外に親切です。

北垣先生にはハーバード大学の中をはじめ、ボストン港近くの新島先生の旧蹟を案



Skyline of Boston

Aug. 22, 1984

Masaki Casag

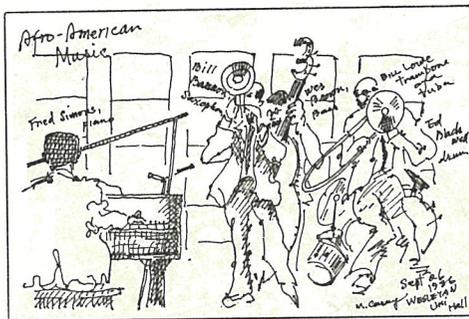
ボストン、スカイライン

内して頂きました。新島先生がボストンにはじめて上陸し、泊って手記を書いたという当時の船員簡易ホテルは高層ビルの谷間に廃屋となって残っていましたが、やがて取り壊される運命にあるようです。

九月二十六日

ミドルタウン

たった今、大学の音楽ホールでのジャズ演奏会から戻ってきたばかりです。ダイナ



アフロ・アメリカン・ミュージック

ミックな響きはまだ耳の奥に残っています。すぐさまステージの印象を描いてみました。ビル・ブラウンとビル・ローはこの大学の音楽学部の黒人教授で、ずいぶん人気があります。

アフロ・アメリカンとはアフリカ系アメリカ人の意味。黒人にかわってこの呼称が一般化しようとしています。

十二月二十一日

ニューポート

十一月十一日初雪。そして十九日、二度めの雪で、しかもかなりな積雪でした。翌朝二十日はマイナス8℃まで気温が下りましたが、その中を九月からアーモスト大学に滞在中の英文科の宇田さんの車で、ロード・アイランド州の州都プロビデンスのブラウン大学に同じ英文科の松山信直先生をたづね、松山先生のアパートに泊めて頂き、翌日、三人でケープ・コッドの突端のプロビンスタウンまでの旅に出ました。

ケープ・コッドのつけ根に位置するニューポートの公園で見たのが、このミステリー・タワー。ほぼ十世紀ごろの建造物と推



ミステリー・タワー

定されているようですが、だれがどういう目的で建てたものかはまるでわかっていません。十世紀ごろの北米大陸の東海岸に、いったいどんな人たちが住んでいたのでしょうか。説明板には、スノー・マンということばも書かれていました。

このミステリー・タワーのすぐ近くにはまたペリー提督の銅像がありました。ペリーはこのニューポートの街の生まれなので、銅像の丸い台座部分には、江戸時代の風俗がレリーフされていました。

ニューポートはニューヨークランドの代表的なリゾート地として有名なところで、豪華な別荘が沢山立ち並んでいます。そのもっとも巨大なものは百二十室もあって、

そのうちの四十室が召使の部屋だと聞きました。アメリカの金持ちはやはり桁が違いますね。しかしその多くはやはり維持しきれなくなって、入場料をとって見学させています。

でもこの地の賑うのはなんといつても夏の間だけですから、季節はずれの今はしんとして、それぞ

れの別荘もかたく扉を閉ざしていました。正午の気温もマイナス5℃くらいでしょう。初冬の大西洋は碧がかった色に鈍くひかり、まことに寒々としています。

十二月三十日

ハートフォード

コネティカットの州都ハートフォードはいまでは保険会社の大きなビルばかりが立ち並ぶしょうもない街ですが、十九世紀の半ばごろから二十世紀の初めまではアメリカ東部の出版の中心地だったといえます。今でも一八七〇年代にマーク・トゥウェインの建てた風変わりな家がこの街に残っていますし、その隣には、ストウ夫人の家もあって、ともに公開されています。トゥウェインは一八九一年投機事業に失敗してこの地を去りますが、トム・ソーヤー、ハックルベリー・フィン、乞食王子などみなこの家で書かれました。『乞食王子』の、ハートフォード卿・ギルフォード卿などの人物名は、コネティカットの街の名からとったものだというのも、こちらに住んでみて認識したことでした。

(大学文学部教授)